

Rさんとの出会い(1)

新田 由紀子

宿に戻ると、キッチンにはいい匂いがしていた。部屋へ上がる前に、買い込んだ今晚の食材と飲み物をキッチンに並べたい。大鍋をかき回していた女性が振り返る。

「オカエリナサイ。コンバンパーティシマス」。スーパーの袋を両手に下げて立つ私を見ると、

「ゴメンナサイ。イマココアケル」と、ギョロ目の魚やハーブの束や干した蜜柑の皮をどけて、俎板をキレイに洗ってくれた。

「あ、いいのいいの。ビールとお酒は冷蔵庫で、あとはこれレンチンで、野菜は切るだけだし」。奮発した京野菜や漬物を取り出すと、彼女は覗き込んで、

「キョウトヤサイキレイネ。ドコデカイマシタカ」。東京ならば、紀伊国屋みたいな店なのか、四条烏丸の食品店で時間をかけて選んだこれも旅の楽しみ。お互いの今晚のメニューから始まって、私たちはおしゃべりに突入した。

千枚漬けとすぐきに赤かぶ、京風おでんに琵琶湖のえび豆、森嘉の豆腐に京菜は湯がいてかつお節。さっと切って盛るだけ。かたわらで彼女は骨付き羊肉をハーブでじっくりと煮込んでいる。フライパンにはお頭付きの魚を何尾も。クラッカーには何やらお手製のディップを載せて大皿へ。手も口も休みない。

今晚は大晦日。そこかしこあまた千年の古寺では、お馴染みの除夜の風景が見られるのだろう。でも、こうして古都のど真ん中の安宿でささやかなご馳走を並べて、宴を張ろうとしている旅行者もいる。

彼女は宿のスタッフではなかった。聞けば京都は9連泊。出身は中国で住まいは東京。さらに、ここへは長野県の茅野からやって来た。念願の古民家を手に入れて、再生中なのだとか。なんという、奇遇だろう。茅野といえば、40年の思い出の山荘を解体撤去したばかり。彼女の話に山間の町が懐かしく蘇る。

宿泊者たちが三々五々集まってきた。コンビニの袋やテイクアウトの器を抱えて。缶ビールとワインに一升瓶も並んだ。

「ドウゾタベテ」と勧められる料理に皆一様に目を輝かせている。